田中　利行

設計演習Ⅱ

課題
プログラムの変容と再構築
Housing（住居）

4年

担当＝
関澤　勝一

田中　利行
この施設は街から溢れだした人達のための＜居場所＞である。しかしここは定住するための場所ではない。ここは自分の居場所を失ってしまったり迷ってしまったとき、新しい居場所を見つけ社会へ戻るまでの仮の宿として存在する。住居スペースを教会と融合させることによって、キリスト教の教えや精神に触れ、自分を見失ってしまった人が自己を確立し、社会との共存性を再興する為の手がかりとなることを意図している。

指導＝関澤　勝一
家族（ファミリー）は簡単にくずれない。現在を家族崩壊の時代という評論家も多いが、実際にはくずれない。簡単にこのシステムがなくなったら人類は滅びてしまう。
とはいえ街の中に、特に人々が大勢出会うところ、駅や地下道に家庭（ホームhome）からはみでてしまった人々がいる。この人々はホームはないが（中には自分以外の家族がいるホームがあるのかもしれないが）生活している。鉄道駅は近代社会が生み出したシステムであり、水が飲め、便所もある。さらに食べ物を売る店もある。ただ無いのは寝具のみ。
寒さにこごえて命があぶない状況になれば、この作品で表現されている生活空間（ユニット）は、そこで寝る人にとっては快適なものである。地下室の暗さは人工の明るさで十分に用が足りる。作者はこれらの人々の群れにひとりひとりが人間であることを意識されるように「宗教」をとり入れている。それはキリスト教。食に飢え、人の情に飢えている人々に現代社会の「施設」ではなく「宗教」を提示したことに、この作品の意味がある。
私はこの作品をみて30年前にみたローマのカタコンベを想い出した。